



「無財の七施」にみる日本的な向社会的行動

著者	山本 佑実, 加藤 久美子, 菅村 玄二
雑誌名	関西大学心理学研究
巻	5
ページ	39-49
発行年	2014-03
その他のタイトル	Conceptualizing the Japanese Prosocial Behavior from the Viewpoint of the “Seven Practices of Giving” in Buddhism
URL	http://hdl.handle.net/10112/10462

「無財の七施」にみる日本的な向社会的行動

山本 佑実 関西大学大学院心理学研究科
加藤 久美子 関西大学大学院心理学研究科
菅村 玄二 関西大学文学部

Conceptualizing the Japanese Prosocial Behavior from the Viewpoint of the “Seven Practices of Giving” in Buddhism

Yumi YAMAMOTO (Graduate School of Psychology, Kansai University)

Kumiko KATO (Graduate School of Psychology, Kansai University)

Genji SUGAMURA (Faculty of Letters, Kansai University)

What is the Japanese-specific prosocial behavior, if any? We attempted to articulate it in terms of the Buddhist Seven Practices of Giving: (a) bodily/behavioral, (b) seat-offering/letting-go, (c) house-offering/hospitality, (d) kind words-giving, (e) smiling, (f) tender looking, and (g) mental/compassionate practices. We argued with psychological evidence that the West-originated concept of prosociality refers basically to active overt behaviors toward others' welfare, whereas the Japanese prosociality involves one's subtle facial expressions and inner gentle attitudes. A possible underlying mechanism might well be theorized, based on Haruki's “alien reinforcement” theory, which can ably explain social behaviors especially in collective cultures.

Key words: Prosociality, Altruism, Buddhism, Cultural differences

向社会的行動 (prosocial behavior) は、1964年の
キティ・ジェノヴィーズ事件を契機に盛んに研究さ
れるようになった。見知らぬ他者に向けた一対一の
援助行動の研究は、1980年代にその隆盛を極めたと思
われているが、現在では組織やグループ間の協力
といったマクロレベルの行動も研究の対象となっ
ている。さらにそうした研究が行動遺伝学や神経科学
などのミクロレベルの知見によっても支持されてき
ている (Dovidio, Piliavin, Schroeder, & Penner,
2006)。つまり、今日の向社会的性研究は、社会心理学
に留まらず、遺伝学・生物学・神経科学・進化心理

学などの関心が合わさり、学際的な研究領域として
再度注目を集めている。

しかし、その研究拠点の多くは欧米であり、日本
でも西洋の向社会的性の概念がほとんどそのまま採り
入れられ、欧米に追随する形で研究がなされてきた。
それによって、たしかに日本での研究は進展したが、
輸入された構成概念を用いて浮かび上がるのは、必
然的に西洋の向社会的性の概念に相当する日本人の行
動ということになる。欧米由来の構成概念をそのま
ま採用することで、類似した行動の文化比較などは
可能になる反面、このやり方では、日本特有の向社

会的行動があったとしても、それが覆い隠され、その内実が見えづらくなるのではないだろうか。

高木 (1991) は、比較文化的な試みが少ないことを指摘したうえで、米国と日本の向社会的行動の内容やその類型の相違点を挙げている。しかし、その一連の試みにおいても、文化差が検討されるのは行動の内容や規定要因であり、“向社会性” それ自体の捉え方が文化によって異なる可能性は吟味されてこなかった。

そこで、本論文では、日本固有の向社会性の概念があるか、あるとすればどのような行動が含まれるのかを論じる。ここでは、数ある文化的要素のなかでも、日本人の思想的背景として馴染み深い仏教を取り上げ、日本的な向社会性を探る切り口としたい。仏教での「布施」は他者への施しを意味し、向社会性と高い共通性をもつ概念である。なかでも、「無財の七施」は、説法としてもよく知られ、一般書でも親しまれている。そこで説かれる内容がどのようなものであるか、心理学の知見と照らし合わせ、仏教思想への科学的な根拠を論じながら、仏教が示唆する日本的な向社会性の概念を模索する。

向社会性の定義

日本独自の向社会性を考えるにあたり、まずは欧米での向社会性の意味を整理しておく。“prosocial”という語は、Johnson (1951) が、児童の攻撃性研究で、anti-social aggression に対して、その目的が社会的な基準に受け入れられるような攻撃行動を“prosocial aggression”と名付けたことから、発達心理学で用いられ始めた (Sears, 1961)。この語が、寄付や援助などの他者志向的な行動を表す語として社会心理学に浸透し、そうした行動を総じて prosocial behavior と呼ぶようになった。そして現在では、攻撃行動の一形態を表していた当初の語意を離れ、援助や愛他心、慈善、分与、同情などのポジティブな行動を記述するためにこの語が用いられている (高木, 1987)。

日本では Mussen & Eisenberg-Berg (1977 菊池 1980) で、この行動が positive social behavior と呼ばれる場合があることを理由に、向社会的行動という訳語が当てられた。一方、順社会的行動という訳語を用いる研究 (高木, 1982, 1987) や事典 (古畑, 1981) もあるが、その後、竹村・高木 (1987) では、順社会的行動という表現から向社会的行動へ

と変更されている。向と順いずれを用いても、“pro-”という接頭辞が持つ“forward”、“in favor of”という意味合いを十全に表すことは難しいものの (松崎・浜崎, 1990)、現在では使用者数の増加から「向社会的行動」が定訳となっている。

なお、向社会的行動と、援助行動 (helping)、利他的行動 (altruistic behavior) の包摂関係については複数の捉え方がある。なかには、援助行動が最も広義の概念であり、その次に向社会的行動、最も狭義の概念が利他的行動であると定義する者もある (Bierhoff, 2001)。しかし、一般的には、向社会的行動が最も広義の概念であり、それが援助行動や利他行動を含むとされる (Dovidio et al., 2006; Eisenberg-Berg & Mussen, 1989)。そこで、本稿でもこれに則り、援助、利他性、協力の3つを含む上位概念として向社会的行動を位置づける。

多くの定義に共通して、向社会的行動とは、外的報酬を期待せず、他者に利益をもたらす行為であるとされる (Mussen & Eisenberg-Berg, 1977; Piliavin, Dovidio, Gaertner, & Calrk, 1981)。コストが伴う可能性 (Mussen & Eisenberg-Berg, 1977) や、行為者の自発性 (Piliavin, Dovidio, Gaertner, & Calrk, 1981)、自由意思で行われること (Bar-Tal, 1976) など、強調点は各々異なるが、総じて、行動の結果が他者の福利に結びつくものを指している。

日本では、菊池 (1984) が、相手に対する援助であり、外的報酬を目的とせず、ある種のコストを伴う自発的な行動と定義している。また、他者の身体的・心理的幸福に配慮し、ある程度の出費を覚悟して、自由意思から他者に恩恵を与えるための行動 (高木, 1987) とも言われるが、向社会性が輸入された概念である以上、その意味するところは当然、欧米の研究とほぼ同様である。

向社会性の構成概念は、Rushton, Chrisjohn, & Fekken (1981) や Johnson et al. (1989) の利他主義尺度にみることができ。見知らぬ人に道を教えるなどの行動を経験した頻度を尋ね、利他性の指標とするのがこれらの特徴である。菊池 (1988) は、この測定形式を参考とし向社会的行動尺度を作成した。日本人に馴染みのある行動 (列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずるなど) を収集しなおしたが、項目を地理的条件などに沿って置き換えたのみで、これらの代表的な向社会性の尺度はすべて、具体的経験の頻度を問う形式を取っている。

向社会性と文化

向社会性の定義やその構成概念から、日本での向社会性研究が、欧米の研究知見を日本文化に当てはめる形で行われてきたことがうかがえる。しかし、金児・金児（2005）が指摘するように、文化的背景の異なる欧米の知見を用いて日本人の様相を説明する際には、その適用範囲などに留意する必要がある。

たとえば、Naganawa, Yamauchi, Yamagata, Matsumoto- Oda, & Oda（2010）は、利他性が高い人ほど他者の利他性を見抜く精度が高いことを検証するため、欧米での他の関連研究にならぬ、Johnson et al.（1989）の利他主義尺度を邦訳して用いたが、想定した結果は得られなかった。その原因の一つとして、利他主義尺度が日本人に適さなかった可能性を論じている。これを受け、小田・山内・永縄・平石・松本（2011）は、異なる社会・文化で作成された尺度を用いて日本人の利他性を正確に抽出することは難しく、文化的背景を踏まえた尺度が必要であると指摘している。

こうした背景からも、日本文化に即して向社会性を捉えなおす必要があるといえよう。ここで、日本文化の特徴を何と捉えるかが論点となるが、本稿では、その仏教的背景に着目したい。仏教での「布施」は向社会性と共通性の高い概念である。加えて、近年、仏教と科学との対話が盛んであり、Well-being研究や臨床実践の分野でも、心理学と仏教が互いの知見をもってその発展に努めている（e.g., Wallace & Shapiro, 2006）。また、宗教は文化の一部であり、かつ文化を形作るという側面もあることから（Saroglou & Cohen, 2011）、宗教性は、文化的背景の違いを考える、適した題材となると思われる。

無財の七施にみる向社会性

布施の概念

布施とは他人に対する施しのことである。仏教徒が行う修行、六波羅蜜「布施（人に安心や財を与える）・持戒（戒をまもる）・忍辱（耐え忍ぶ）・精進（善行のために努力をする）・禪定（心を静めて瞑想を行う）・智慧（悟りに至るための智慧）」の中でも第一におかれる（久保, 1964）。サンスクリット語で“dāna”と表し、「donation」（寄付）の語源と通じている（門賀, 2010）。布施は、施しを行う施者、布施を受け取る受者、そして施物の三つがそろって可能

となる（三枝, 2004）。

布施には、大きく3つの種類がある。「財施」「法施」「無畏施」である。「財施」とは、信者が僧に金品や食べ物など、生活に必要な財物を施すことを指し、「法施」は、僧が財施に報いるために法を説くことを指す（中村, 2006）。一般的に仏教では、出家者は法施を行い、在家者は財施を行うと考えられている（平川, 1963）。「無畏施」とは、菩薩の行であり、人びとを恐怖の思考から救うことである（須藤, 1982）。

布施を行ううえで問われることは、その者の心構えである。石田（1986）は、相手に対する憐憫、同情、自己内省、優越感といった不純を捨てて、虚心に布施が行われることが必要であるとしている。また、率先して自身が行うべきことで、他人に勧め自分が行わないことは誤りとされている（城福, 2000）。

では、与える財や、知識がない場合には、布施は行うことはできないのであろうか。『雑宝蔵経』において、物や財がなくとも施しは行えるとして、七つの行為をあげている（須藤, 1982）。具体的に、「身施」^{しんせ}「牀座施」^{しょうざせ}「房舎施」^{ぼうしゃせ}「言辞施」^{ごんじせ}「和顔悦色施」^{わげんえつしきせ}「眼施」^{げんせ}「心施」^{しんせ}である。

身施

仏教では、「礼儀正しく人に接すること」（須藤, 1993, p. 382）や「善い心をもって他人と和らぎ、善いことをしようと努めること」（中村, 2001, p. 1618）とあるように、邪心なく、礼儀に則った態度を務めることが身施とされる。麻生（1984）によると、身施は善いことを心で思うだけではなく、実際に行動に起こさなければならない。自分の身体を使って施しを行う奉仕であり、具体的に、重い荷物を持つ、人のお世話をし、目の不自由な人の手を引いてあげる、人の力になる、困っている人を助ける、といった行為が身施とされる。そのような積極的な援助に限らず、身だしなみを整え、相手に不快な思いをさせないこともまた身施となる（佐藤, 1991）。

身施と呼ばれる布施の内容の多くは、一般的な援助行動と共通する。高木（1991）は、向社会的行動を日米で収集し、それぞれ8～9種類のクラスターに分け、両国ではほぼ同様の構造を確認した。寄付・分与行動などの「財施」に相当する行為を除くと、ボランティア、署名、小さな親切行動、社会的弱者への援助など、ほとんどが財はなくとも身ひとつで

行える援助行動であった。

この日米比較から、まず、重い荷物を持つなどの、身施として説かれる行為と、心理学での向社会的行動が類似の内容であり、仏教の布施、少なくとも身施については、向社会的行動と共通の概念を持つことが示されたといえる。これは、無財の七施がもとより題材として西洋の向社会性と決して異なる概念ではないことを意味する。

次に、日本人の道德規範を形成している仏教が、多様な他者への施しを説いているにもかかわらず、日本で収集された行動のほとんどが、既存の向社会性と共通しており、一見してその独自性が見受けられない点である。これは、西洋とは異なる日本的な向社会性があるという本論の主張を損なうものではない。繰り返すが、向社会的行動という西洋の概念を旗印に行動を収集すれば、それに相当する行動しか浮かび上がらないのは当然である。

一方、西洋の向社会的行動とは共通しない身施の側面もある。身だしなみを整え、マナーを守り、他者のために身を整える行為として、身施に含まれる。大坊(1990)は、化粧は顔の印象管理という面での社会的マナーであり、個性が突出しない中性化した化粧、控えめな服装、周囲とのバランスといった身だしなみを、日本人女性が心がけていると報告している。つまり、日本人にとっての化粧は、他者に違和感を与えないための行為として心がけられる身施といえる。身だしなみを整えることまでもが、日本人の感覚では「布施」であると捉えられる。このことは、身施が、他者への積極的で顕在的な援助行動に特徴づけられる西洋的側面と、仏教が他者への施しとする身だしなみとしての側面の両方を含む概念であることを意味する。

従来の向社会的行動の研究では、明確に對他的な行為のみを取り扱い、一見、對自的であるようで他者の福利が考慮された行動については、ほとんど検討されてこなかった。そのような行動は、向社会性研究の新たな領域になり得るかもしれない。

牀座施

牀とは腰掛のことであり(須藤, 1993)、他人のために、席を譲ることが牀座施とされる(中村, 2001)。電車やバスなどで、妊婦や老人、障害を持った人々に席を譲ること、延いては人生を生きる上で、譲り合いの心を持つことも牀座施である(麻生, 1984)。

譲ることに対する返礼を期待してはならず、何かを要求したり、報恩を求めてはならないとされる。

電車やバスなどの公共交通機関で、お年寄りや障害者、妊婦、あるいは子どもに座席を譲るという行動は、利他行動、援助行動、向社会的行動などの質問紙の項目に含まれることもあるが(e.g., 菊池, 1988; Rushton, Chrisjohn, & Fekken, 1981)、その行動をターゲットにした欧米の研究はほとんど見当たらない。日本では、三井(1987)が自ら行った5つの観察研究を通して、電車内で座席を譲る行動を考察している。たとえば、1978年から翌79年までに実施された自然的観察では、高齢者に対して自発的な座席譲渡が見られたのは50%であり、1980年にはシルバーシート満席時に、そこに座っていた場合、座席譲渡をしたのは、大学生が50%と最も多く、続いて高校生が40%、中高生と女性会社員が30%前後、男性会社員が20%、そして、最も少ないのが主婦で3%であった。

三井(1987)によると、シルバーシートが誕生したのは1973年の敬老の日で、「電車内で着席は先着順」とされてきたが、「老人や身体障害者には座席を譲るべき」という社会通念がルール化したものと見なされている。しかし、牀座施の理念からすると、ルールによって促進されるべきものかどうかは疑問の余地がある。実際、当時の新聞では、高齢者を中心に7割近くがシルバーシートの廃止を希望し、なかには「譲ってもらえない時ほど頭にくる」という投書もあったという(三井, 1987)。

座席譲渡に特化した文献は、欧米ではほとんど見受けられない。Stevenson(1991)は、中国と日本という集合的社会での向社会的行動の発達に着目し、中国の小学校の教科書を分析し、無私無欲の教育目標をもつ共産主義と儒教の伝統により、高齢の労働者に席を譲る話が模範的な行動として掲載されていると述べている。日本は共産主義ではないが、儒教の影響を受けているため、高齢者への気遣いが道德規範になっており、そこに仏教も交わり、座席譲渡が一般的な通念になっているのかもしれない。

向社会的行動に対する仏教のもつ最大の示唆は、牀座施が身施に含まれていないという点である。座席譲渡は、欧米では研究の主題にはあまりされないものの、向社会的行動の例として取り上げられることは稀ではない。このことが示しているのは、欧米では、ボランティア活動や困っている人への援助な

どの「身施」と同列に牀座施が捉えられているというのである。

では、なぜ欧米ではこれらの行動を区別せず、仏教では区別するのか。それは、仏教が、座席譲渡を単に他者のための離席行動と見ているのではなく、「譲る」という精神性に重きを置いているからではないだろうか。つまり、この背景にあるのは、仏教という「無執着」(detachment)であり、座席を譲るという具体的な表現になっているが、その意味は自分が得たものを手放すことと考えられる。それゆえ、「譲り合いの精神」こそ、牀座施の本質なのかもしれない。無執着については、仏教心理学やマインドフルネス療法では、セルフ・コントロールのスキルとして取り扱われることもある(Kwee, Gergen, & Koshikawa, 2006)。無執着という個人内のスキルから、譲り合いという社会的な行為にまでは、まだまだ研究が進んでいないが、牀座施の追究は、向社会的行動の研究に新しい視点をもたらす可能性があるように思われる。

房舎施

「他人を家のなかに自由に出入りさせ、泊まらせること」(中村, 2001, p. 1618)とあり、他人を家に招くことや、宿泊させることが房舎施とされる。今日の日本では、僧侶や見知らぬ旅人等を家に泊めることはほとんどない。しかし、麻生(1984)によると、昔時は、僧侶や旅人等を自身の家に宿泊させることが房舎施であった。現代では無償で行うホームステイや、実際に旅人を宿泊させずとも、家に訪ねてくる人々をもてなすことも房舎施である。また、店や会社を掃除し、来訪する人を快く招いてあたたかく接することも房舎施のひとつである。

見知らぬ他人を家に泊めるという意味での房舎施は、現代ではほとんど失われているが、四国遍路には「接待」と呼ばれる文化が、今日もなお残っている。樋笠・黒田(2011)によれば、接待とは、いわゆる「お遍路さん」に対して物品や金銭、宿泊を無償で提供することを指す。彼女らは、2009年に徳島県で面接とアンケートにより、遍路に休憩の場を提供する「接待所」の実態調査を行っている。それによると、接待所では、お茶などの飲料の提供が最も多く、他には線香、救急道具、靴下、タオル、ティッシュなどの日用品、菓子、果物などの食料、なかには布団が用意されている場合もあった。接待は個

人単位やコミュニティ内のグループといった地域住民が主体となる場合は最も多く、接待を行う動機としては、従来が、大師信仰や死者や先祖の供養、遍路の代参などがあったとされるが、この調査では、宗教的な理由はほとんどなく、「遍路に喜んでほしい」といったボランティア感覚が多く見られたことが指摘されている。遍路に関しては、巡礼の意識調査やその心理的な効果など巡礼者(施される側)の視点に立った研究(高村・篠田, 1998)が多く、接待者(施す側)の視点の研究は少なく、このデータは貴重と言える。

宗教とは異なる文脈における現代の房舎施といえ、ホームステイであろう。しかし、ホームステイに関する研究は、ホームステイをする側の異文化適応プロセスを扱ったものがほとんどであり(Crealock, 1993; Kinoshita, 2001; 長井, 1986, 1988)、ホームステイをさせる側に焦点を当てたものは非常に少ない。そのなかにあつて、国は違えど、国家規模でホームステイを地方活性化のビジネスにしようとしているマレーシアでの調査は注目に値する。Ahmad, Jabeen, & Khan (2014)は、1250ものホームステイ起業家(有効回答数853)を対象に、その動機を質問紙で尋ねたところ、他の中小企業の企業動機と異なり、収入目的も高いが、それ以上に、自己満足が最も高く、一方で、サービスや設備、安全面、清潔面での懸念があることも判明した。無償ではないにせよ、自分の家を他者に提供するということは、単なる収入目的では行われず、また清潔面などのホスピタリティが問題になることは、房舎施の精神に通じるところがある。

房舎施は、宿の提供だけでなく、自宅や会社を掃除して来訪者をもてなすという意味がある。東京オリンピック招致のスピーチで、「おもてなし」という言葉が話題になったが、そこで英語の“hospitality”や仏語の“accueil”という言葉を用いなかったのは、日本独自の接待の仕方があるためだと言われている(乾, 2013)。この接待文化は現代の日本にも息づいていると考えられ、実際、新大阪ユースホステルが、国際ユースホステル連盟より世界一清潔として表彰されている(朝日新聞, 2011)。こうしたサービス精神を表す「おもてなし」についても、向社会的性の観点からもっと検討されてもよいだろう。

言辞施

「やわらかい言葉で人に接すること」(須藤, 1993, p. 382) や「優しい思いやりに満ちた言葉をかける」(奈良, 1989, p. 240) とあるように、思いやりをもって、やさしい言葉で他人と接することが言辞施とされる。病気で悩み苦しんでいる人や、逆境にいる人びとに対する励ましや優しい言葉は、言うまでもなく人の心を和らげ救いになる。普段の生活での、「ありがとう」「こんにちは」といった感謝や挨拶の言葉も言辞施とされる(麻生, 1984)。

実際、他者からの言葉がけによって活力が湧いたり、良い言葉に触れることで心が和らいだりすることがある。こうした良い言葉を他者に向けることが言辞施の実践といえる。Aarts, Custers, & Marien (2008) は、「頑張れ」といった励ましの言葉をサブリミナル提示したあとで、「いい感じ」などのポジティブな応答の言葉を見せると、励ましやそれへの的確な応答がない場合に比べ、瞬発的な握力が強くなることを示した。これは、励ましの言葉を与えることで、相手の動機づけや、それに伴う身体的な強さが高まる可能性を示唆している。

また、他者を思いやる優しい歌詞にふれると、そうした意味合いの薄い歌詞にふれた場合と比較して、様々な暴力行為に対する攻撃的な認知が和らぐという実験もある(Greitemeyer, 2011)。これは、争い事での敵意を和らげるために、優しい言葉がけが有効であることを支持するものといえる。さらに、より抽象的な言葉の効果として、「寄付=愛 Love」という標語を掲げた募金箱では、「寄付=援助 Helping」と書かれたものよりも、寄付される金額が多くなることが明らかとなっている(Gueguen & Lamy, 2011)。これは援助という行為自体を思い起こさせるよりも、広くそれを規定する思いやりや優しさの概念にふれる方が、向社会的な行動の促進に効果的であることを示している。言葉の布施によって、他者が第三の他者に対してポジティブな行いをする可能性を高めることも、ひとつの利他的行為であると考えられる。

日米の向社会的行動の分類について、調査対象の年齢層を拡げた研究結果からは、相手に励ましや慰めの言葉を与える精神的・心理的な援助行動も、両国に共通のクラスターとして得られている(高木, 1991)。これは、身施と同様に、励ましなどの言辞施も、西洋の向社会性と共通していることを示してい

る。

挨拶・感謝の言葉については、互いの社会的関係を認めたり、相互作用を円滑にしたりといった目的で行われるバーバル・コミュニケーション(小林, 1986)としての機能は論じられていても、それを相手の福利につなげるために行うという見方で心理学的に論じた研究はほとんど見受けられない。今後、挨拶や感謝の対他効果や、向社会性の指標となるかの検討が求められる。

和顔悦色施

「いつも優しい顔、微笑で人に接すること」(須藤, 1993, p. 382) や「いつもやさしい、微笑を絶やさぬ顔をして、人に接すること」(中村, 2001, p. 1618) とあるように、常にこやかで、穏やかな顔つきを心がけることが和顔悦色施とされる。一説には、顔の語源は、「氣表」であり、感情が表れるところを示しており、面は「思うて」がなまったものだと言われる(佐藤, 1991)。感情が顔面に表出されることは、仏教でも着目されており、仏像の柔和な微笑みも和顔悦色施とされる(麻生, 1984)。

一般的に、西洋では笑顔それ自体を向社会的行動に含めることはないが、笑顔が他者に与える効果については心理学的な示唆がある。たとえば、他者の笑顔を見ることで、自分もつられて笑顔になることがある。これは表情模倣(facial mimicry)と呼ばれるが、Dimberg, Thunberg, & Elmehed (2000) は、顔下刺激であっても、笑顔を呈示されると、大頬骨筋が活性化することを見出している。さらに、笑顔の表情筋パターンを意図的に作ることで、快感情が生起することが知られており、これは表情フィードバック仮説と呼ばれる(岸・竹内・陶山, 2002)。自分が微笑むことで、相手にそれが伝染し、またそれによって相手も幸福感が喚起されるとすれば、和顔悦色施もまた向社会的行動と呼べる余地がある。

さらに、Winkielman, Berridge, & Wilbarger (2005) は、笑顔の写真を閾値下で提示すると、怒りや中性の顔と比べて、飲み物を「美味しい」「飲みたい」と感じることを示した。また、Barger & Grandey (2006) は、飲食店の店員の笑顔の強度が、客が感じるサービスへの満足感を高める結果を観察調査によって得ている。その際、挨拶やアイコンタクトなどとの比較が行われたが、サービスに対する評価を高める効果を持つのは、他でもなく笑顔であ

った。

このような対面場面だけでなく、非対面場面でも笑顔は他者に影響を与える。荒川・竹原・鈴木(2006)は、悲しみ・不安・怒り・喜び場面で受け取る顔文字の表情が、各感情の緩和にどのような影響を及ぼすかを検証した。その結果、不安を感じている時に笑顔の顔文字を受け取ると、他の顔文字に比べ、不安が和らぐことが示された。これは、現代の和顔悦色施といえよう。

和顔悦色施は、「和顔施」とも呼ばれるが、「色」という言葉にも留意したい。笑い表出時の「顔色」の変化については、顔面皮膚温の分析がなされているが(山田・黒田・渡辺, 2001)、それが他者に及ぶ効果については研究が進んでおらず、表情研究の将来的な方向性の1つであろう。また、和顔施は、本来、「優しい微笑み」であり、この「優しさ」を心理学的にどのように捉えるかについても、今後の課題といえる。

眼施

「人に良い目で接すること」(須藤, 1993, p. 382)や「憎むことなく、好ましいまなざしをもって他人を見ること」(中村, 2001, p. 1618)とあるように、思いやりをもって相手に優しい眼差しを向けることが眼施とされる。親が子供に向けるような慈愛のこもった眼差しも眼施とされ、対人関係において、優しい眼差しで接することは、心がけひとつで誰にでもできる施しであると言われる(佐藤, 1991)。「眼は口ほどにものを言い」という言葉があるように、視線は非言語であるが、言語に迫るほどのコミュニケーションのチャンネルである。

眼施と向社会的性の接点を考えるうえで着目すべきは、無財の七施が優しい「笑顔」と優しい「眼差し」を分けて捉えていることであろう。人は会話のおおよそ70%の時間を、相手の眼を見ることに費やしている(Vatikiotis-Batson, Eigsti, Yano, & Munhall, 1998)といわれるほど、眼に強く意識をやっている。たしかに、眼に注目することには意義がある。和顔施の項でふれたが、人が笑うと大頬骨筋だけでなく、眼を縁取る眼輪筋と呼ばれる筋肉の反応が活性化される。この眼輪筋は意識して動かすことが困難であると言われ(Ekman, Roper, & Hager, 1980)、偽りでない心からの笑顔(デュシェンヌ・スマイル)の指標とされている。眼に注意が向くことには、他者を

判断するうえで、重要な意味があると言えよう。

眼施でいう眼差しには、心理学でいう視線行動や眼球運動に含まれる、視線の対象、時間、方向、軌跡、瞬目の程度、瞳孔の大きさといった諸側面(Argyle, 1988)が具体的に述べられているわけではない。研究数が少ない原因の1つには、眼施のいう眼差しが、心理学における「視線」とは異なり、「優しい」「あたたかい」と形容されるような、他者への態度を表しているからではないだろうか。実際、眼施は「慈眼施」と呼ばれることもあり、仏教の慈悲(compassion)の概念とも関連が深いと思われる。仏教的な慈悲の訓練によって、背内側前頭前皮質や下前頭回が活性化し、共感性が高まるという研究(Mascaro, Rilling, Negi, & Raison, 2013)もあり、慈悲は向社会的に関わる重要な要素といえる。眼施の向社会的性を論じるならば、どのような視線行動であれば他者の福利に影響するのか、というミクロな行動特性の研究だけでなく、慈悲や親愛(love-kindness)など仏教で重視される心理的状态および特性と併せて検討することが望まれる。

心施

「善い心をもって他人と和らぎ、善いことをしようと努めること」(中村, 2001, p. 1618)とあるように、他人に対して、思いやりや善心をもって接するように努めることが心施とされる。心の持ちようでも物事の見方が変化することは、仏教の中核的な思想の一つであるが、心から喜びや悲しみに共感すること、相手の人の立場を考慮すること、他人の心を自身の心として捉えることが、心の施しとされる(麻生, 1984)。

ここで述べられている思いやりや相手の立場に立って考えるという意味での共感とは、社会心理学よりも臨床心理学での用法に近いと思われる。Rogers(1957)は、セラピストに要求される条件として、「一致」、「無条件の肯定的配慮」(unconditional positive regard)、「共感」を挙げた。肯定的配慮とは、クライアントを尊重する気持ちや心遣いを指し、「受容」とも呼ばれる。また、共感とはクライアントの内的照合枠を情動的要素や意味とともに正確に知覚することと定義される。内的照合枠とは、個人が意識する可能性のある全領域であり、感覚や知覚、意味、記憶などのすべてが含まれる(Rogers, 1959)。これらの条件は、今日では学派を超えてその重要性が認

識されており、心理療法基礎論として理解されている(岡村・小林・菅村, 2010)。

現代の心理療法の重要な条件に、仏教において古来より重視されている布施の概念の一つが入っていることは、それ自体、興味深い事実である。だが、心施が心理療法という特殊な人間関係に限定される概念ではないことにも留意する必要がある。すなわち、心施はセラピストのあり方ではなく、普段のわれわれの道徳的基礎 (ethical foundation) を説いている点である。

向社会的行動との関係で示唆深いのは、心施は文字通り「心」であり、実際の行いそのものではなく、「努めること」を意味する点である。この点は、Rogers (1957) の主張とも共通するところであり、受容することや共感することではなく、それをセラピストが「体験」しているという、いわば「心」の状態を述べている。向社会的行動の文脈で、共感はたびたび出てくるが、共感そのものが向社会的なのではなく、向社会的行動の要因の1つと考えられている (Eisenberg & Miller, 1987)。西洋に起源をもつ向社会的行動が「行動」的な布施を扱っているとすれば、心施は実際の行為を伴わない内的な状態も、他者に施す実践と位置づけられる点は興味深い。仏教的、あるいは日本的な向社会性とは、行動にのみ限定されない概念として理解されていることを暗示している。

総合考察

西洋由来の向社会性の概念について、仏教における無財の七施と比較してきた。それを通して、布施の思想は、向社会性の概念を含みつつも、さらに広い概念であることが判明した。仏教では、明示的な援助行動はもちろん、他者に向けた表情や視線のほか、身だしなみや自宅の清掃なども、他者に対する「施し」と捉えられ、さらには、相手のことを考えるという、行動には表出されない思いやりなどの心理的態度も同列に位置づけられる。

「向-社会性」(pro-sociality) とは、字義的には、他者への指向性であり、その意味で、仏教における布施も、ある種の向社会性を表すものといえる。しかし、西洋では、比較的、積極性の高い、能動的な行動がその構成概念となっているのに対して、仏教では、他者に対する能動的な関わりとは呼べない行動や状態も含まれる。集団主義的な文化では、自己

と他者とが明確に区別されておらず (Markus & Kitayama, 1991)、自己の態度が、他者のありようと、ある部分において一体化していると考えられているため、日本では、ある意味、自己未分化の「向社会性」の概念が形成されているのかもしれない。それゆえに、西洋からすれば、「向」社会的とは呼べないような、一見、自己完結的な態度であっても、日本では「他者への施し」として捉えられ、「無財の七施」が一般に受け入れられているのかもしれない。

実際、日本では思いを遣るという心の動きの方が、行動自体よりも重要であると捉えられる場合があり、行動に表れない思いやりに着目する必要性も論じられている (坂井, 2005)。今後、日本文化により即した向社会性を測定する尺度を開発するとすれば、他者に直接的に影響を及ぼす行動だけでなく、結果として間接的に影響を与えるような自己の態度やありようを構成概念として想定する必要がある。

向社会的行動のメカニズムについては、現在なお多くの議論があるが (Dovidio et al., 2006)、日本的な向社会性の概念は広範囲に及ぶため、従来の理論の射程には必ずしも収まらない。そこで、最後に、向社会的行動の理論ではないものの、人間の社会的行動の基礎理論として提起された、春木豊の行動制御論 (see 春木, 2000 for a review) に触れておく。1970年代に発表されたこの理論は、文化的差異を踏まえてアメリカの学習理論を改良したものと評され (Bond, 1988)、その後、Triandis (1994, 1995) に、集合主義的な日本文化での社会的行動を説明する原理として取り上げられ、今日でも高く評価されている (Pastorino & Doyle-Portillo, 2011)。

Haruki, Ito, Oue, & Nedate (1979) は、二者間の行動制御において、従来の外的強化と自己強化に加えて、新たに「内的強化」と「他者強化」という概念を提起し、その後、多くの実証研究を行った。内的強化とは、外的強化とは反対に、強化子の提供者が学習者で受理者が教授者というタイプである。他方、他者強化とは、自己強化とは反対に、強化子の提供者も受理者も教授者であり、利他動機や思いやりによって生じる強化の型といわれる。仮に無財の七施を実践する学習者を想定すれば、当然、相手から感謝されること (=外的強化) や自分自身も幸せに感じること (自己強化) で、実践が強化されることはあり得る。しかし、特に日本では、それに加えて、他者への施しを相手が受け止めること (=内的

強化)、また相手が喜ぶこと (= 他者強化) で、さらに実践が促進されるという四重強化が作用すると推察される。日本では他者強化は外的強化と同様に機能するが、アメリカでは他者強化はそれほど効果的でないというデータもある (春木, 2000)。

日本の文化的土壌に根ざした向社会性を考えるとき、西洋の概念を直輸入するだけでなく、東洋文化で生まれた思想をもっと前面に出したアプローチも求められる。そして、日本文化で生まれ育った理論こそ、そのメカニズムを明らかにする可能性を多分に秘めているのではないだろうか。

付記

主に、山本が序論から向社会性までのくだりと「身施」「言辞施」「和顔悦色施」「眼施」を、加藤が布施の概念と各施の定義を担当した。菅村は本論文の素案を出し、「牀座施」「房舎施」「心施」「総合考察」を執筆し、全体の構成と修正を行った。

文献

- Aarts, H., Custers, R., & Marien, H. (2008). Preparing and motivating behavior outside of awareness. *Science*, **319**, 1639.
- Ahmad, S. Z., Jabeen, F., & Khan, M. (2014). Entrepreneurs choice in business venture: Motivations for choosing home-stay accommodation businesses in Peninsular Malaysia. *International Journal of Hospitality Management*, **36**, 31-40.
- 荒川 歩・竹原卓真・鈴木直人 (2006). 顔文字付メールが受信者の感情緩和に及ぼす影響 感情心理学研究, **13**, 22-39.
- Argyle, M. (1988). *Bodily communication*. (2nd ed.). London: Methen.
- 朝日新聞デジタル (2011). 「世界一清潔」な YH に新大阪ユースホステル 朝日新聞デジタル 2011 年 1 月 16 日 <<http://www.asahi.com/kansai/travel/news/OSK201101160024.html>> (2014 年 1 月 13 日)
- 麻生恵光 (1984). 仏教の智慧に聞く 朱鷺書房
- Barger, P. A., & Grandey, A. A. (2006). Service with a smile and encounter satisfaction: Emotional contagion and appraisal mechanisms. *Academy of Management Journal*, **49**, 1229-1238.
- Bar-Tal, D. (1976). *Prosocial behavior: Theory and research*. Washington DC: Hemisphere.
- Bierhoff, H-W. (2001). *Prosocial behavior*. New York: Psychology Press.
- Bond, M. H. (Ed.). (1988). *The cross-cultural challenge to social psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Chin, D. & Kameoka, V. A. (2005). Sociocultural influences. In M. Hersen, J. C. Thomas, & F. Andrasik (Eds.). *Comprehensive handbook of personality and psycho-pathology, Vol. 2*. Hoboken, NJ: Wiley & Sons. pp. 67-84.
- Crealock, A. E. (1993). *The homestay experience: Its linguistic and cultural effects*. Unpublished master's thesis, University of Alberta.
- 大坊郁夫 (1990). 社会的スキルとしてのマナー行動 化粧文化, **22**, 30-40.
- Dimberg, U., Thurnberg, M., & Elmehed, K. (2000). Unconscious facial reactions to emotional facial expressions. *Psychological Science*, **11**, 86-89.
- Dovidio, J. F., Piliavin, J. A., Schroeder, D. A., & Penner, L. A. (2006). *The social psychology of prosocial behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Eisenberg-Berg, N., & Miller, P. A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, **101**, 91-119.
- Eisenberg-Berg, N., & Mussen, P. H. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美 (訳) (1991). 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- Ekman, P., Roper, G., & Hager, J. C. (1980). Deliberate facial movement. *Child Development*, **51**, 886-891.
- 古畑和孝 (1981). 愛他的行動 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新 (監修) 心理学事典 平凡社 pp. 1-2.
- Greitemeyer, T. (2011). Exposure to music with prosocial lyrics aggression: First evidence and test of the underlying mechanism. *Journal of Experimental Social Psychology*, **47**, 28-36.
- Gueguen, N., & Lamy, L. (2011). The effect of the word "love" on compliance to a request for humanitarian aid: An evaluation in a field setting. *Social Influence*, **6**, 249-258.
- 春木 豊 (2000). ヒューマン・リーンフォースメント 他者強化の概念 心理学評論, **43**, 501-518.
- Haruki, Y., Ito, H., Oue, Y., & Nedate, K. (1979). Four types of reinforcement processes in humans. *Psychological Reports*, **45**, 955-962.
- 樋笠奈穂美・黒田乃生 (2011). 四国遍路における接待所ならびに接待文化の現状と課題 ランドスケープ研究, **4**, 57-61.
- 平川 彰 (1963). 出家者の財施 印度學佛教學研究, **2**, 737-742.
- 久崎孝浩 (2006). 向社会的行動に対する恥・罪悪感の機能 VISIO(九州ルーテル学院大学紀要), **35**, 1-15.

- 乾 善彦 (2013). 五輪招致で話題になった「おもてなし」どんな言葉なの? 2013年9月13日 <http://the-page.jp/detail/20130913-00000005-wordleaf> (2014年1月13日)
- 石田瑞磨 (1986). 日本仏教思想研究第三巻 思想と歴史 法蔵館 p.56.
- 城福雅伸 (2000). 仏教と倫理 印度學佛教學研究, **48**, 910-915.
- Johnson, E. (1951). *Attitudes of children toward authority as projected in their doll play at two age levels*. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.
- Johnson, R. C., Danko, G. P., Darvill, T. J., Bochner, S., Bowers, J. K., Yau-Huang Huang, Park, J. Y., Pecjak, V., Rahim, A. R. A., & Pennington, D. (1989). Cross-cultural assessment of altruism and its correlates. *Personality and Individual Differences*, **10**, 855-868.
- 金児咲嗣・金児 恵 (2005). 文化と宗教 金児咲嗣・結城雅樹 (編) シリーズ 21世紀の社会心理学:3 文化行動の社会心理学 北大路書房 pp.136-149.
- 菊池章夫 (1984). 向社会的行動の発達 教育心理学年報, **23**, 118-127.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- Kinoshita, A. (2001). *Negotiating identities: Experiences of Japanese female students in Vancouver homestay settings*. Unpublished master's thesis, Tokyo Metropolitan University.
- 岸 太一・竹内成生・陶山大輔 (2002). 表情および視線 春木 豊 (編) 身体心理学 川島書店 pp.69-90.
- 小林祐子 (1986). あいさつ行動の日米比較研究 日本語学, **5** (12), 5-75.
- 久保繼成 (1964). 大乘涅槃經にあらわれた布施 印度學佛教學研究, **12**, 645-648.
- Kwee, M. G. T., Gergen, K. J., & Koshikawa, F. (2006). *Horizons in Buddhist psychology*. Chagrin Falls, OH: Taos Institute.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Mascaro, J. S., Rilling, J. K., Negi, L. T., & Raison, C. L. (2013). Compassion meditation enhances empathic accuracy and related neural activity. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, **8**, 48-55.
- 松崎 学・浜崎隆司 (1990). 向社会的行動研究の動向 心理学研究, **61**, 193-210.
- 三友健容 (2012). 仏教心理学キーワード辞典 井上ウイマラ・葛西賢太・加藤博己 (編集) 春秋社 p.94.
- 三井宏隆 (1987). 社会的ルールについての一考察 哲学, **84**, 243-266.
- 門賀未央子 (2010) 保坂俊司 (監修) 図解仏教入門 ナツメ社 p.94.
- Mussen, P. H., & Eisenberg-Berg, N. (1977). *Roots of caring, sharing, and helping: The development of prosocial behavior in children*. San Francisco: Freeman.(菊池章夫 (訳) (1980). 思いやりの発達心理 金子書房)
- 長井 進 (1986). 日本人交換留学高校生の異文化への適応過程 教育心理学研究, **34**, 55-61.
- 長井 進 (1988). 外国人交換留学高校生の日本における適応過程 心理学研究, **59**, 37-44.
- Naganawa, T., Yamauchi, S., Yamagata, N., Matsumoto-Oda, A., & Oda, R. (2010). Do altruists detect altruists easier than non-altruists? *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, **1**, 2-5.
- 中村 元 (2006). 新・仏教辞典第三版 誠信書房
- 中村 元 (2001). 広説佛教語大辞典 東京書籍
- 奈良康明 (1989). 七種施 奈良康明 (編) 仏教名言辞典 東京書籍 p.240.
- 奈良康明 (1994). 奈良康明 (編) 新版日本の仏教を知る辞典 東京書籍株式会社 p.256.
- 小田 亮・山内新作・永縄拓也・平石界・松本晶子 (2011). 利他性の進化認知科学的研究のための尺度の検討 観光科学, **3**, 23-33.
- 岡村達也・小林孝雄・菅村玄二 (2010). カウンセリングのエチュード 遠見書房
- Pastorino, E. E., & Doyle-Portillo, S. M. (2011). *What is psychology?* Belmont, CA: Wadsworth.
- Piliavin, J. A., Dovidio, J. F., Gaertner, S. L., & Clerk, R. D., III (1981). *Emergency intervention*. New York: Academic Press.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Counseling Psychology*, **21**, 95-103.
- Rogers, C. R. (1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relations as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.), *Psychology: A study of science*, Vol. 3. *Foundations of the person and the social context*. McGraw-Hill, pp. 184-256.
- Rushton, J. P., Chrisjohn, R. D., & Fekken, G. C. (1981). The altruistic personality and the self-report altruism scale. *Personality and Individual Differences*, **2**, 293-302.
- 三枝充恵 (2004). 仏教概説 法蔵館
- 坂井玲奈 (2006). 思いやりに関する研究の概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, **45**, 143-148.
- Saroglou, V., & Cohen, A. B. (2011). Psychology of culture and religion: Introduction to the JCCP special issue. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **42**, 1309-

- 1319.
- 佐藤俊明 (1991). 続・禅のはなし 社会思想社
- Sears, R. (1961). Relation of early socialization experiences to aggression in middle childhood. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **63**, 466-492.
- Stevenson, H. W. (1991). The development of prosocial behavior in large-scale collective societies: China and Japan. In Hinde, R. A., & Groebel, J. (Eds.), *Cooperation and prosocial behaviour*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 89-105
- 須藤隆仙 (1982). 仏教故事名言辞典 新人物往来社
- 須藤隆仙 (1993). 仏教用語辞典 新人物往来社
- 高木 修 (1982). 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学, **23**, 137-156.
- 高木 修 (1987). 順社会的行動の分類 関西大学社会学部紀要, **18** (2), 67-114.
- 高木 修 (1991). 米国における向社会的行動の分類学的研究 関西大学社会学部紀要, **23** (1), 141-165.
- 高村淳也・篠田基行 (1998). 遊びと安らぎの研究 — 四国遍路における巡礼を中心に — 日本体育学会大会号, **49**, 137.
- 竹村和久・高木 修 (1987). 向社会的行動の動機と内的・外的統制志向性 教育心理学研究, **35**, 26-32.
- Triandis, H. C. (1994). *Culture and social behavior*. New York: McGraw-Hill.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder, US: Westview Press.
- Vatikiotis-Batson, E., Eigsti, I.-M., & Munhall, K. G. (1998). Eye movement of perspectives during audiovisual speech perception. *Perception & Psychophysics*, **60**, 926-940.
- Wallace, B. A. & Shapiro, S. L. (2006). Mental balance and well-being: Building bridges between Buddhism and Western psychology. *American Psychologist*, **61**, 690-701.
- Winkielman, P., Berridge, K. C., & Wilbarger, J. L. (2005). Unconscious affective reactions to masked happy versus angry faces influence conscious behavioral and judgments of value. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 121-135.
- 山田貴志・黒田 勉・渡辺富夫 (2001). 顔画像と顔面皮膚温の同時計測による笑いにおける顔色の動的分析 ヒューマンインタフェース学会論文誌, **3** (2), 23-30.